

不良発展としての軍事化

グレン D. フック^{*}

岡山大学

Militarization as Maldevelopment

Glenn D. HOOK^{**}

Okayama University

SUMMARY

This article deals with the relationship between development and militarization, challenging the idea that military spending is beneficial to economic growth. Militarization is distinguished from militarism – a system of rule – and is understood to take place on different levels, to have various aspects, and to involve dynamic processes. It is in this broad context that the relationship between militarization and development is considered. The article indicates how the development processes in the industrially developed countries, the socialist countries and the Third World countries have all, to some extent, been influenced by militarization. This indicates militarization is not tied to a particular mode of production. What is of importance for understanding the role of the military in development processes is the military's role in state security. This is distinguished from people's security as,

本稿の英語版は Jan Danecki 編の不良発展に関する論文集(国連大学より刊行予定)に収録される予定である。

* 広島大学平和科学研究センター客員研究員

** Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

in certain cases, the enhancement of state security does not lead to the enhancement of the people's security. People's security is considered to include the idea of basic human needs. The relationship between development and militarization in Third World countries is given special attention as, at the present moment, it is the people of the Third World who suffer most as a result of militarization processes. The use of resources for the military in the Third World is, in general, not beneficial to economic growth, and hinders development providing security for the people. The same is generally true for the industrially developed economies.

発展プロセスにおける軍事の役割は、近代化論の主流においてしばしば称賛されてきた。¹⁾近代化論者は、多くの第三世界諸国における軍隊が、植民地時代の遺産を継承して、団結、忠誠、合理性、軍人氣質、ヒエラルキー、発展のために必要不可欠な近代意識などを併せもった近代的な組織であるという点を強調する。近代化の牽引車としての軍隊 (military as modernizer) というこの考え方は、第三世界における軍による政治介入や軍事政権を、戦略的な観点からばかりでなく、発展という観点からも正当化するものである。²⁾軍が政治的役割を果たすことにより、国家機構を強化し、経済成長のために国民を結集し、発展の速度を加速することができることとされる。また、政治介入による意志決定過程における軍事的影響力は軍事費を吊り上げるが、軍事費の増大は経済成長のプラス要因と見なされるがゆえに、軍人の政治介入は発展に貢献するものとされる。³⁾本稿は、軍事化と発展、より正確には不良発展 (maldevelopment) との関係を検討することにより、上述の発展プロセスにおける軍の役割の真偽を問う。主に先進工業資本主義諸国と第三世界諸国に焦点を当てる。

まず、軍事化なる概念を検討しておこう。軍事化には次の三つの要素が内在していると考えられる。(1)世界、地域、国家、個人のそれぞれのレベルで起る。(2)軍事政治、経済、社会文化のさまざまな側面をもつ。(3)国内、国外、国内外の動的なプロセスを伴なう。軍事化のこれらのレベル、側面、プロセスは、互いに相容れないものではなく、しばしば相互に関連しているが、時と場合により異なり、直接的にも間接的にも、発展のプロセスにおいてそれぞれの度合いに対応している。しかし、明らかに軍事化への方向は、資産や価値の分配、社会的目標の定義などによって、文民の軍事への従属関係の増加を意味する。

軍事化は軍国主義とは区別されるべきである。⁴⁾用語として古くから定着している「軍国主義」は、軍事化の代りに使用されることもあるが、より正確には、社会、政治的意志決定のほとんどが軍事的規準や価値にもとづいて行なわれる一国内の政治体制を言う。(19世紀末のドイツや第二次大戦中の日本が典型的な例である。) 軍が直接に政治権力を握っていなくても、政治体制は、価値を分配する手段として弾圧政治を維持するイデオロギー、価値、態度、行動様式を内包しているのである。従って、軍事的な影響は、政治、経済、社会、文化など、人々の

生活のあらゆる側面に浸透する。⁵⁾ 外国に対する侵略戦争と国民に対する弾圧は軍国主義の現われそのものである。

軍国主義の中心的要素が軍事的影響力の過剰であるのに対し、軍事化の中心的要素は軍事的影響力の増加それ自体である。⁶⁾ 軍事化のプロセスが軍国主義という政治体制をもたらす可能性はあるが、現実には必ずしもそうなるとは限らない。例えば、第二次世界大戦中のアメリカは、軍事化の過程にはあったが、軍国主義国家ではなかった。⁷⁾ 戦後においても、軍国主義やファシズムに反対した戦勝国である米ソのいずれも軍事化している。即ち、アメリカは軍産複合体や国家安全保障国家(national security state)⁸⁾を経験し、ソ連は軍官複合体や軍事化された社会の発展を経験してきた。⁹⁾ 二つの超大国は、垂直的な軍事ヒエラルキーの頂点にあって、世界的レベルにおいて、また第三世界において、軍事化のプロセスを促進してきた。これは、とめどない核兵器、通常兵器の軍事競争、世界を分裂させる同盟網、「北」から「南」への兵器移転の物語るところである。

第三世界における軍事化のプロセスは、先進工業資本主義諸国や社会主義諸国のそれとは異なる。軍事化のプロセスとしては、軍事政権や政治における軍事的影響力の増大、軍事組織の強化、国民の弾圧などがある。もちろん、第三世界における支配体制として軍国主義はありうる。例えば、アミン時代のウガンダの軍事化は相対的に低い水準にとどまったが、Brzoskaはウガンダを軍国主義による支配体制としている。¹⁰⁾ しかし、一般には、軍事化のプロセスに強力に影響されている支配体制の方が普通である。第三世界、先進工業資本主義国、社会主義国における軍事化のプロセスが、近代化のプロセスと密接に関係していることは明白であろう。以上見たように、軍事化は、軍国主義と同様に、一般的普遍的には定義しがたいものである。¹¹⁾ 図1～3は、軍事化がいかに広範囲にわたるものであるかを示すものである。図では、世界、地域、国家、個人の各レベルにおける軍事化の顕著な軍事政治、経済、社会文化の側面は区別されているが、異なるレベルと側面の間の動的な相互関係や相互作用、プロセスは示されていない。

三つの図に示された軍事化は、現在までの発展プロセスを多かれ少なかれ軍事化された不良発展と見なしたものと見えよう。このような発展プロセスにおける軍事化の様々なレベル、側面、プロセスのすべてが重要な要素であったわけでは

图 1 军事-政治 aspects of Militarization

External		Internal	
Global	Regional	National	Individual
frequency of wars, interventions, military actions, use of force	wars (eg Middle East), military interventions in Third World, military conflict between Third World countries	participation in war, intervention, use of force; repression, counterinsurgency	victim or aggressor, conscription, infringement of rights
nuclear and conventional qualitative and quantitative vertical and horizontal arms race	regional arms race (eg Middle East)	nuclear or conventional arms race	acceptance of state's weapons, non-opposition to arms race
alliances, security treaties, bases, weapon deployment, citizens under arms	NATO, WTO, European nuclear deployments, military under arms in Third World	alliance membership, bases, deployments, military size	acceptance of alliance, bases, deployments
spread of military, quasi military governments	Third World military governments	military government, military's political influence	support for military
globalization of military doctrines, (ideologies) facilitating militarization (deterrence, balance of power, national security, counter insurgency)	all world regions	degree military policies are based on doctrines	acceptance of military doctrines

☒ 2 Economic Aspects of Militarization

External		Internal		
Global	Regional	National	Individual	
arms transfers, globalization of modern weapons, military know-how	flow from industrialized to Third World, increase in Third World exports	importer (dependency) exporter (domination)	'merchant of death,' worker in arms manufacturing	
military expenditures (including R&D) and use thereof	burgeoning expenditures in Third World, domination of R&D by industrialized (esp. US, Britain, France)	increase in proportion of resources used for military, military R&D	taxes, scientists involved in military R&D	
distortions in capital accumulation, economic disequilibrium, exploitative international division of labor	transfer of capital to center, periphery's domination, asymmetrical relationships between Third World and industrialized countries	national indebtedness, economic disequilibrium, domination or exploitation	fluctuations in employment, exploitation	
military use of resources, (human, natural, infrastructures) military involvement in economic activity	weapon production in industrialized, consumption (war, purchase) in Third World; military in business	military-industrial complex, military involvement in business	military working in economic role	
indirect costs (environmental destruction, public nuisances), lost opportunity costs (eg for health, welfare, education)	high costs in Third World	high in weaker, peripheral areas (e.g. greater suffering in peripheral areas due to lost opportunity costs and indirect costs)	death, injury, inability to reach full potential due to indirect, lost opportunity costs	

☒ 3 Socio-Cultural Aspects of Militarization

External		Internal		
Global	Regional	National	Individual	
fetishism of weaponry, exterminism	Third World fetishism of sophisticated weapons, super-power exterminism	military displays, parades, apotheosis of weapons, acquiescence in exterminism	own weapons, war toys, war games, acceptance of exterminism	
globalization of image of nuclear power, weapons as symbols of power, prestige	Third World acceptance of nuclear imagery	superpower as nuclear power; use of weapons as symbols of power, prestige	acceptance of nuclear imagery; weapons as symbols of power, prestige	
ascendancy of military values, world views	domination of military values in Third World politics, undermining of democratic values in industrialized countries	socio-cultural institutional support for military values, world views (education—military training in schools, textbook glorification of military; religion—eg 'just war'; family—socialization into violence acceptance)	disregard for other's life, values; acceptance of violence, hostility, revengefulness	
preparedness to resort to threat, violence	constant threats of war (Middle East)	threats to use nuclear, conventional weapons	preparedness to use violence (interpersonally, terrorism, revolution)	
violence and military soaked information environment	Image of Third World as violent	military propaganda, literature, music, theater, films, etc.	use of militarized language, spreading military promoting information, participating in militarized media	

ない。しかし、発展プロセスにおける軍事政権、軍事に影響された政権の役割は歴史的に重要な要素であったと言える。Sakamotoによれば、¹²⁾イギリスやフランスという先発者(early starter)は軍事大国にはなったが、クロムウェルとナポレオンという軍人近代化論者による政治支配体制はごく短い間であった。他方、後発者(late comer)たるドイツ、日本、イタリアの場合、対内的、対外的軍国主義が結合された。また、スターリン治下のソ連も軍事化された。そして今や、第三世界諸国が、西欧諸国に追いつくため、上述の先発者、後発者の経験を二、三十年の非常に短い期間に縮め、世界的規模において軍事化しつつある。このように発展途上国が相次いで発展速度を加速し、軍事的政治的経済的により強い先発者からの独立を獲得、維持するために軍事を強化したことを“病理的学習”と名づけよう。¹³⁾

過去数百年の発展のプロセスにおける軍の役割は時と場合により異なるが、軍の役割の本質は、国家の安全保障にある。¹⁴⁾国民が、自らのアイデンティティーと国家との一体感を密接にもつ限りは、国家の安全保障という軍の役割に疑問はもたないであろう。国家の安全保障と国民の安全保障との一致がより強く意識されればされるほど、国民が、国家の名において自らの安全保障を犠牲にする傾向が強くなる。¹⁵⁾安全保障に対する脅威、理解の相違、権力や価値の配分に対する不満、軍の行動の正当化に関する国民の合意の欠如、軍による国内的脅威の弾圧、あるいは“侵略戦争”に巻き込まれることなどにより、国民が自らのアイデンティティーと国家との密接な一体感をもたない時には、国民に国家との一体感をもたせるために、政治権力者が国家機構を利用して外的脅威を創ったり、あるいは反政府運動を弾圧するため軍隊を出動させたりする。戦争のような国家の危機に際しては、国家機構は、国民が国家と一体感をもつと否とにかかわらず、加害者か被害者のいずれかの立場の選択を、国民に強制するのである。¹⁶⁾軍事化した不良発展下においては、国家安全保障 — 主に特定の政治、軍事、官僚エリートの安全保障なのであるが — は、結局、国民の安全保障を犠牲にすることになる。

国民の安全保障と国家の安全保障のこのような区別は、発展の問題を取り上げる時に重要である。なぜなら、発展は国民の安全保障を増進するプロセスと定義しうるからである。この規範的定義は、現実世界の発展パターンとは明らかに異

なる。現実における発展とは、政治権力者が自らの世界に沿った社会を維持、あるいは再形成するために、内的、外的強制の状況下の許された範囲内で行なった決定の結果として現われるものである。このような決定は、国民の安全保障を必ずしも増進しない。確かに、安全保障のひとつの側面は、危険から身を守ることである。それゆえ、国家を守るための軍事組織の強化が、国民の安全保障に寄与することは当然である。しかし、それは同時に、国家の要求を優先させ、国家における軍事組織を強化させる意味をももち、結局は、国民を犠牲にしてまでも国家を強化する方向に機能するのである。このプロセスを、Feithは第三世界の研究において“抑圧的開発政治”(repressive developmentalist regimes)と名づけている。¹⁷⁾

安全保障を単に外的な危険から身を守ることのみに限定する考え方は、あまりにも偏狭な考え方であろう。というのは、安全保障は、恐怖、不安、心配から身を守る意味をももち、このような人間の基本的欲求を満たすこと、また、生活の物質的、質的側面を向上させること、などを含んでいるからである。だが、軍事化の進行は、この広義の安全保障の達成を妨げる。マイナスの経済成長下においては、先進工業諸国においてさえ、軍事費の増大が、国民の生活、健康、福祉、教育の犠牲のもとに行なわれている。¹⁸⁾また、何百万人もの人々の基本的欲求すら満たされていない第三世界においては、軍事費が直接的に国民生活の場さえも奪っている。¹⁹⁾しかしながら、いずれの場合にも、軍事費はどのくらいでよいのかという間に答えることができるのは、国家機構自身以外にはないのである。²⁰⁾

国家の安全保障と国民の安全保障の間に生ずるギャップや衝突は、国家が絶えず軍を正当化しなければならない、ということの意味している。この正当化は時と場合により異なるが、現在のアメリカにおいて軍は、(1)ファシズムと軍国主義に対する勝者、および(2)ソ連や国際共産主義の脅威に対する国家の防御者、として正当化されている。第二次大戦直後の短期間の非軍事化の後、核時代において軍が直面する根本的なパラドックスにもかかわらず、アメリカは再び軍事化した。このパラドックスというのは、以前をはかるに上まわる量の核兵器、通常兵器の蓄積や兵器開発プロセスにおける“技術的要請”(technological imperative)によって拍車のかかった質的な兵器“改良”により安全保障が減少しているにも

かかわらず、いかに安全保障を実現しうるかというところにある²¹⁾抑止論は、戦略であるばかりでなく、イデオロギーでもあるが、戦争のない時には、量的質的軍備競争を正当化し、民間と軍の社会資源をめぐる争いにおいて軍を勝利させる要因ともなる。だが、核戦争においては、国家の安全保障と国民の安全保障の間の根本的ギャップは戦争のない時より一層明白となる。というのは、抑止論においては、選ばれた政治、軍事、官僚エリートが核シェルターに入って身を守る特権を有するのに対し、多数の一般市民が殺傷されることが前提とされているからである。²²⁾軍事は、安全保障を実現しえないにもかかわらず、このような基本的な不平等を前提とする。このシステムを維持するためには、“赤化するよりは死を”という思想の軍事化が必要となる。²³⁾

大部分の第三世界諸国においては、国家の軍事化は植民地の遺産を背景に起っている。社会の価値分配の最終的手段としての弾圧と、国内的インフラの歪曲等がそれである。第三世界諸国における軍隊は同質ではないが、²⁴⁾次の2点で正当化されることが多い。(1)民族独立解放闘争の勝者、および(2)特に反乱軍に対する国家の安全の守護者としてである。しかしながら、第三世界諸国の多くが植民地であったがために、国家は必ずしも民族と同じ境界をもたないし、逆もまた然りである。それゆえ、武力は、国家に対する対内的脅威を抑えるためだけでなく、結果として戦争に至りうる国家の境界線の拡張のためにも行使されうるであろう。そのうえ、国内において、軍隊、準軍隊、警察の武力が少数民族、小作農、労働者、学生に対して行使されれば、反対に、武力による反応も起りうる。ゲリラ活動、テロ行為、反乱などがそれである。逆に、被抑圧者による武力行使は、国家暴力を正当化する機能を果たすことにもなる。旧植民地にはありうるのだが、— 特に部族などの対立の多いところでは — 権力を狙う他の勢力が国家に軍事的に挑戦するようなことがあれば、このようなダイナミクスは国を内乱に陥らせ、分離主義運動を促し、外部勢力の介入を招く要因となろう。このような要因は、第三世界における軍事化の内的要因のひとつであり、現状に対する軍事的脅威と同様、終局的には現状の軍事化をもたらすものである。

しかし、軍事化のプロセスが非植民地諸国においても進行しているということを考えれば、第三世界の軍事化は単に植民地の遺産とのみ見なすことはできない。²⁵⁾

軍事化は、領土を支配せんがためだけの産物では決してない。むしろ植民地化が、軍事化した不良発展を促進する思考様式や生産様式の産物であったと言える。この思考様式とは、社会内、社会間の対立、闘争を終局的には武力行使によって解決するということを容認するものである。植民地の民衆に対する武力や弾圧、ドレスデンの爆撃、広島、長崎への原爆投下、そして将来起りうる核兵器の使用を容認することは、この思考様式の現われである。さらに、戦後、多くの第三世界諸国が物理的には植民地支配から脱却したにもかかわらず、資本主義圏の影響下においてこれらの国々の従属を継続せしめる思想様式は、未だに残存している。「北」から「南」への戦略的ソフトウェアの移転は、この思考様式の継続に貢献している。例えば、“国家安全保障”主義の下で、軍事費は増大し、軍事ハードウェアの輸入は急速にのび、また、対外的（戦争）にも、対内的（弾圧）にも、武力依存の度合はますます高まっている。²⁶⁾

生産様式に関して言えば、資本主義諸国の発展プロセスにおいて原料と市場を必要とするため、軍事力の行使を伴った場合も多い。マルクス・レーニン主義的観点からすれば、帝国主義と軍国主義はいずれも資本主義的生産様式の産物であり、軍隊は独占資本の道具に他ならない。²⁷⁾このような枠組において、戦後の第三世界と先進工業資本主義諸国に共通して進行している軍事化のプロセス、特に戦後における軍産複合体の肥大——軍人エリートと文民エリートとの権益の一致——が理解されるであろう。だが、このような観点からは、第三世界の社会主義国における軍事化も、またソ連の軍官複合体、武器輸出、外国への軍事介入なども、説明できない。資本主義国家、社会主義国家双方の武器輸出や軍事介入は、軍事化が特定の生産様式に限られるものではないことを示唆するものである。

しかしながら、第三世界の大部分の国々が資本主義工業諸国に、非対称な従属関係で結び付けられているため、これらの国は第三世界の軍事化により強い影響を与えている。従って第三世界の発展戦略が輸入代替であれ、輸出志向工業化であれ、また自力更生であれ、中心——周辺という従属構造から抜け切れないまま、予盾と不平等を生み出している。その結果、²⁸⁾ (1)地主、買弁資本家、そして先進工業国の利益となる価値分配システムを維持するため弾圧を行なうこと、(2)国際資本依存から脱却しえないにもかかわらず、中心からより独立した状況において、

国民の要求に応じられる政治的、経済的能力の欠如のため弾圧政治を行なうことが必要となる。これは、第三世界の軍事化が従属的不良発展を強化する機能をもっていることを意味する。先進資本主義工業国、特に米国との従属関係には四つの側面がある。²⁹⁾即ち、(1)武器移転による技術依存、(2)武器購入を通じての先進資本主義工業国への資本の移転、(3)西側における第三世界の軍人の階級社会化による軍隊の組織、訓練、戦略など軍隊の型の移転、³⁰⁾(4)超大国の介入の可能性を増す中心と周辺との関係に第三世界をリンクさせること、の四つである。ここで最も重要なのは、軍事ハードウェアと技術の移転である。なぜなら、このような移転なしに第三世界における戦争、弾圧、発展の従属構造は維持しえないからであろう。

戦後の武器移転は、大まかに以下の期間に分類しうる。³¹⁾(1)60年代の中頃までは、超大国の冷戦対決下において、武器は軍事援助という形で同盟国に移転された。(2)60年代の中頃から、70年代の中頃にかけては、二超大国が、フランス、イギリス、ドイツなどの工業国と、ますます精巧になる兵器類の売却を争った。(3)70年代の中頃からは、第三世界の生産者が、厳しい競争環境の下で、武器売却競争に加わってきた。³²⁾80年代初期からは、アメリカは第三世界だけでなく、西側同盟国への武器売却に一層努力し、また日本は先端軍事技術の輸出国として、一歩前進してきた。³³⁾武器生産、武器輸出の一層の世界化により、武器の軍事的政治的使用は別として、経済的社会的文化的影響が生ずるが、狭義の発展の観点からすれば、経済的影響が最も重要である。そこで、軍事支出と経済成長の関係に焦点を当ててみよう。

軍事支出と経済成長の関係にはマイナスであるという合意が明らかに研究者の間に高まっている。³⁴⁾先進資本主義工業国において、経済成長を単純に発展の指標と見なすのは問題があることは別としても、GDP(国内総生産)の上昇のような統計的データにもとづけば、軍事支出と成長の相関はプラスではない。日本とアメリカを比較するのは極端ではあろうが、すべてのOECD諸国の軍事支出を比較すると、軍事支出は経済成長を促進するどころか、むしろ下げているのである。³⁵⁾国連刊行物の言うように、軍事支出は非生産的であり、特に軍事支出の間接的影響を含めればなおさらのことである。³⁶⁾間接的影響というのは、(1)機会コス

トの喪失、(2)資本投資の浪費、(3)科学者、エンジニアの国内的頭脳流出、(4)稀少資源の乱用などであり、また(5)自然破壊(戦争、兵器実験、軍事訓練などに起因)、民間組織に及ぼされる軍事の影響(運輸、通信施設の使用、乱用)などの間接的なコストもある。³⁷⁾

軍事支出が経済成長に与える影響を理解するためには、軍人の賃金、高度技術兵器、低技術の軍事関連物資などに、いかに費されているかを明確に知ることが重要である。軍事支出が経済成長にプラスの影響を与えるという立場では、軍事技術発展の副産物である技術革新などが強調される。もちろん、先進工業諸国は、軍事的研究開発(R & D)の結果、技術的副産物を獲得しうるが、これは技術発展の段階に依る。Kaldorによれば、軍事技術が“進歩的”な場合、プラスの副産物を生む可能性は否定できないが、現在多くの先進工業諸国における軍事技術は、決して進歩的なものではなく、“デカダン”(decadent)あるいは、“バロック”(baroque)と名づけられている。³⁸⁾軍事的研究開発の機能、特に米国におけるそれは、軍備競争の速度を緩める緊張緩和政策にもかかわらず、軍備競争を自発的に促進してきた。³⁹⁾

全世界における第三世界の軍事的研究開発や軍事生産に占める割合は非常に小さい。⁴⁰⁾これは、いくつかの発展途上国を除けば、軍事的研究開発や軍事的生産による技術的副産物のプラスの影響はなく、第三世界の軍隊は消費者であるということの意味する。⁴¹⁾また、たとえ重要な技術的副産物が手に入ったとしても、逆の場合もありうる。つまり、民間部門で利用可能な副産物が、軍事機密保持という要請のため、民間で使用できなくなる。⁴²⁾

第三世界の発展プロセスにおける軍隊の直接的な役割は、軍事的研究開発や軍事生産より重要である。なぜなら、弾圧者、近代化の牽引車としての軍隊は、国内、国外からの資本投資を促進することになるからであろう。Benoitは、このような軍隊の役割を第三世界の経済成長に寄与してきたものとして評価している。⁴³⁾だが、Benoitの研究は、特にBallにより、軍事支出の負担と経済成長の間のプラスの相関係は偽であるという、厳しい批判を受けている。⁴⁴⁾また、Benoitのマクロ統計学的アプローチでは、間接的コストも機会コストの喪失も取り上げられていない。これは、軍事支出の負担が先進工業諸国より第三世界諸国にとってより苛

酷であるということの意味している。

不良発展としての軍事化を論じたこの小論では、より広い意味での軍事化の概念の必要性に注意を喚起しようとしてきた。先進工業諸国と発展途上国、とりわけ後者における軍事化の進行は、国民の安全保障をもたらす開発を妨げる。それゆえ、軍事化は不良発展と見なされてきたのである。

真の発展を論じることは、発展としての非軍事化を論じることである。ここ2、3年の間、開発のために軍事費を転用するのは望ましいという意識が高まってきている。Sivardは次のような提案を行なっている。⁴⁵⁾ (1)すべての子供を伝染病から保護するための予防接種計画(6億ドル)、(2)今世紀終りまでにはすべての成人が読み書きができるようにする計画(12億ドル)、(3)医療補助者の急増のための予防とコミュニティ計画(25億ドル)、(4)第三世界の食糧自給能力の改善と栄養失調防止のための開発援助の増加(30億ドル)、(5)都市貧民のための自分らの手で建設できる最小限の仮小屋拡大計画(7.5億ドル)、(6)2億人の栄養失調児が十分に成長するための補助的食糧供給(40億ドル)、(7)6億人の栄養不良の妊婦と授乳期の女性が健康を維持し、幼児死亡率を減少させるための補助的食糧供給計画(15億ドル)、(8)1億の新しい生徒席の付加による小学校の大規模な増加(32億ドル)、(9)1990年にはすべての人間が清潔な水を使えることを目標とする衛生的な水の供給システム(30億ドル)。第三世界諸国が、軍事費を他の目的に用いることに目を向けることにより、軍縮を要求する声が高まってきた。第1回国連軍縮特別総会、第2回国連軍縮特別総会などは、この反映である。

しかしながら、国民の安全保障を増進する開発は、軍縮のみによっては達成されないというのが本稿における見方である。軍事の目標達成から民間の目標達成へと資源などを再配分することは、第三世界の貧しい人々、虐げられた人々の苦境を改善するためには非常に重要ではあるが、問題の本質ではない。それは現代国家体制における軍事化と、発展の絡み合っているプロセスである。非軍事化のプロセスが進行している時にのみ、軍縮、つまり現実の武装解除、軍事費の再配分は可能になると言ったほうがより正確であろう。安全保障は発展と軍事とのリンクであることから、国民に安全保障をもたらす枠組の中における発展のあり方を理解することが絶対必要である。軍隊が、守るべき国家に属する国民の安全保障

にさえも脅威を与えることがあるので、もうひとつの安全保障の研究と、もうひとつ (alternative) の発展のあり方の研究を結びつけることが重要であろう。この点に関しては、もうひとつの安全保障に非暴力手段の可能性を考慮する必要があるであろう。最も楽観的に言えば、非暴力手段を含む安全保障は、発展と平和 (積極的・消極的) を結びつける方法を呈示できるといってもさしつかえないであろう。⁴⁶⁾

註

- 1) 例えば、S. Huntington, *Political Order in Changing Societies*, Yale University Press, New Haven, 1968; G. Kennedy, *The Military and the Third World*, Duckworth, London, 1974; L. Pye, "Armies in the Process of Modernization" J. Johnson 編, *The Military and Society in Latin America* (Stanford University Press, Stanford, 1964) 所収。
- 2) 政治における軍事の問題を扱った文献の概観としては、A. Perlmutter, "The Comparative Analysis of Military Regimes", *World Politics*, Vol. 33, No. 1, 1980
- 3) 発展における軍の積極的役割に関する研究で最も大きな影響をもつのは、Benoit による研究である。E. Benoit, *Defense and Economic Growth in the Developing Countries*, Lexington Books, Lexington, Mass., 1973; "Growth and Defense in Developing Countries", *Economic Development and Cultural Change*, Vol. 26, No. 2, 1978。
Benoit 批判については、N. Ball, "Defense and Development : A Critique of the Benoit Study" 前掲誌 Vol. 31, No. 3, 1983 および同論文所載の文献参照。
- 4) 軍事化と軍国主義については、Marek Thee, "Militarism and Militarization in Contemporary International Relations", *Bulletin of Peace Proposals*, Vol. 8, No. 4, 1977。軍国主義の概念については、Kjell Skjelsbaeck, "Militarism, its Dimensions and Corollaries : An Attempt at Conceptual Clarification", *Journal of Peace Research*, Vol. 16, No. 3, 1979。
- 5) この定義は、丸山真男 "軍国主義" (『政治学辞典』 東京, 1954) による。
- 6) "過剰" の概念は、Vagts の古典的定義による。A. Vagts, *A History of Militarism : Romance and Realities of a Profession*, George Allen & Unwin, London, 1938。
- 7) これは、"garrison state" という概念の示唆するところである。H. Lasswell, "The Garrison State Hypothesis Today", S.P. Huntington 編 *Changing Patterns of Military Politics* (Free Press of Glencoe, New York, 1962) 所収; 同 "The Threat Inherent in the Garrison Police State", *National Security and Individual Freedom*

- (New York, 1950) 所収, など参照。
- 8) 軍産複合体(今日では長ったらしく、軍産官学複合体と呼ばれている)の初期の研究については、Fred Cook, *The Warfare State*, Macmillan, New York, 1962 参照。所謂、“iron triangle”の事例研究としては、G. Adams, *The Iron Triangle : The Politics of Defense Contracting*, Transaction Books, New York, 1981。
“National security state”については、D. Yergin, *Shattered Peace : The Origins of the Cold War and the National Security State*, HM., Boston, 1977, および M. Raskin, “Nuclear Exterminism and the National Security State,” New Left Review 編 *Exterminism and Cold War* (New Left Review, London, 1982) 所収。
 - 9) E. Jahn, “The Role of the Armaments Complex in Soviet Society (Is there a Soviet Military-Industrial Complex?)”, *Journal of Peace Research*, Vol. 12, No. 3, 1975, および D. Holloway, “Technology and Political Decision in Soviet Armament Policy”, *Journal of Peace Research*, Vol. 11, No. 4, 1974。
 - 10) M. Brzoska, “The Concept of Third World Militarization” International Peace Research Association (IPRA) 第10回大会提出論文, Gyor, 1983。
 - 11) Ulrich Albrecht は、軍国主義の普遍的定義は「恐らく無意味であろう」とさえ言っている。Ulrich Albrecht, “Technology and Militarization in the Third World Countries in Theoretical Perspective”, *Bulletin of Peace Proposals*, Vol. 8, No. 2, 1977。
 - 12) Sakamoto の国際平和研究学会 (IPRA) 事務局長としての演説参照。 *International Peace Research Newsletter*, Vol. 19, No. 3, 1981。
 - 13) Hiroharu Seki, “Global Militarization and Its Remedy”, IPSHU Research Report No. 3, 広島大学平和科学研究センター, 1979。
 - 14) 現代における軍と国家については、A. Perlmutter, *The Military and Politics in Modern Times*, Yale University Press, New Haven, 1977 参照。
 - 15) 民族主義的、愛国主義的、軍国主義的教育がこれを助長することは明らかである。教科書検定制度を通じた日本政府によるこのような教育の復活の試みについては、拙稿 “Education for Peace : Censorship and Reality Definitions in Japan”, *Journal of Further and Higher Education*, Vol. 3, No. 1, 1979。
 - 16) Albert Camus, “Neither Victims nor Executioners”, Peter Meyer 編 *The Pacifist Conscience: Classic Writings on Alternatives to Violent Conflict from Ancient Times to the Present* (Holt, Reinhart & Winston, New York, 1966) 所収。
 - 17) H. Feith, “Repressive-Developmentalist Regimes in Asia”, *Alternatives*, Vol. 7, No. 4, 1981。
 - 18) レーガン政権の下での米国における軍拡のインパクトについては、B. Kubbig, “Military Build-up vs. Nondefense Cuts: The Case of the US during the Reagan

- Administration”, I PRA 第10回総会提出論文, Gyor, 1983。
- 19) E.A. Nordlinger, “Soldiers in Mufti : The Impact of Military Rule upon Economic and Social Change in the Non-Western States”, *American Political Science Review*, Vol. 64, No. 4, 1970。
 - 20) M. Kaldor, “Warfare and Capitalism”, *Exterminism and Cold War*(前掲) 所収。
 - 21) “技術的要請”(technological imperative)を論じたものとしては, M. Kaldor, “Military R & D : Cause or Consequence of the Arms Race?”, *International Social Science Journal*, Vol. 95, No. 1, 1983。
 - 22) この点に関する今日の諸見解については, R. Scheer, *With Enough Shovels. Reagan, Bush and Nuclear War*, Random House, New York, 1982 参照。
 - 23) 軍事化の進行が文化などに影響を与える過程を概観した数少い研究のひとつとしては, 次のものを参照。R. Luckam “The Armament Culture”, I PRA 第10回総会提出論文, Gyor, 1983。
 - 24) Perlmutter 前掲論文によれば, 軍人志向には次の3つのタイプがあるとされる。
 1. 職業軍人, 2. 近衛兵, 3. 革命戦士。
 - 25) 例えば, タイの場合, 1932年における最初の軍事クーデターは, フランスに留学した学生の帰国によるタイの軍事的近代化の産物であり, 過去50年間の大部分において, タイが軍政下におかれるという状況を作り出した。
 - 26) 国家安全保障主義の発展に関する数少い研究のひとつとしては, P. Lock, “Armament Dynamics : An Issue in Development Strategies”, *Alternatives*, Vol. 6, No. 2, 1980。
 - 27) J. Leider, “The Critique of Militarism in Soviet Studies”, A. Eide and M. Thee 編 *Problems of Contemporary Militarism* (Crown and Helm, London, 1980) 所収を参照。
 - 28) D. Senghaas, “Militarism Dynamics in the Context of Peripheral Capitalism,” Eide & Thee 前掲書所収。
 - 29) R. Luckham, “Militarism, Force, Class and International Conflict”, A. Eide & M. Kaldor 編 *The World Military Order : The Impact of Military Technology on the Third World* (Praeger, New York, 1979) 所収。
 - 30) この点に関する秀逸な議論は, 次の論文を参照。M. Wolpin, “External Political Socialization as a Source of Conservative Military Behaviour in the Third World”, K. Fidel 編 *Militarism in Developing Countries* (Transaction Books, Brunswick, N.J., 1975) 所収。
 - 31) Stockholm International Peace Research Institute (SIPRI), *World Armaments and Disarmament Yearbook*, Taylor and Francis, London 年刊。
 - 32) 詳細は, T. Ohlsson, “Third World Arms Exporters – A New Facet of the

Global Arms Race,” *Bulletin of Peace Proposals*, Vol. 13, No. 3, 1982。

- 33) 日本の動きは、米国の圧力の下で、先端技術を米国に輸出するため、軍事技術を輸出しないという一般原則に例外を設けたものとなっている。
- 34) N. Ball, “Military Expenditure and Socio-Economic Development”, *International Social Science Journal*, Vol. 95, 1983。同論文の豊富な註はこのことを明らかに示している。また註3も参照。
- 35) A. Cappelin, N. Gleditsch, *et al.*, “Does Military Spending Stimulate Economic Growth? A Study of the OECD Countries”, I PRA 第10回総会提出論文, Gyor, 1983。
- 36) 例えば, *Review of the implementation of the recommendations and decisions adopted by the General Assembly at its Tenth Special Session on development and international economic cooperation. Study on the relationship between disarmament and development* 国連事務総長報告, New York, 1981年10月5日, A/36/356
- 37) 機会コストの喪失と間接的コストの議論としては, T. Szentas, “Economic Effects of Global Militarization”, *Hungarian Studies on Peace Research*, 1983。また, D. Dabelko and J.M. McCormick, “Opportunity Costs of Defence : Some Cross National Evidence”, *Journal of Peace Research*, Vol. 14, No. 2, 1977
- 38) M Kaldor, *The Baroque Arsenal*, Hill and Wang, New York, 1981。
- 39) Kaldor 前掲論文。注21 参照。
- 40) J. Bandopadhyaya, “Disarmament and Development : Structural Linkages”, *Alternatives*, Vol. 4, No. 1, 1978。
- 41) 輸入される軍需品の高い技触水準のため、技術物副産物があったとしても経済の要求に合致するものとはなりえない。この点については, M. Kaldor, “Military Technology and Social Structure”, *Economic and Political Weekly*, Vol. 11, No. 5-7, 1976 および R. Luckam 前掲論文。
- 42) Szentas 前掲論文参照。
- 43) 註3 参照。
- 44) 註3 参照。
- 45) R. Sivard, *World Military and Social Expenditures*, WMSE Publications, Virginia, 1977。
- 46) 非暴力的行動については, G. Sharpe, *The Politics of Nonviolent Action*, Porter Sargent, Boston, 1973。“積極的”, “消極的” 平和概念の区別については, J. Galtung, “Violence, Peace and Peace Research”, *Journal of Peace Research*, Vol. 6, No. 3, 1969。